

FAERIES IN THE WORD

優鬼の森の封印石

こころ耕稼

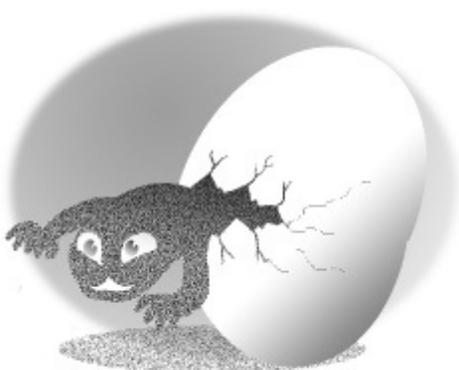


第1章 何かが生まれようとしている

 彩虹房

第
1
章

何か生まれようとしている



1章 何か生まれようとしている

百合は宿題を終えてシャワーも浴びたし、後は寝るだけになった。すでに父親にはおやすみを言ってきたし、母親はいまだ帰ってこない。ベンチャー企業の部長職ってとてもいそがしいのだろうな。父親は家にも明日が切の仕事にせいを出している。おそらくお決まりの徹夜になるのだろうな。何しろ無理してこの高層マンションの一室を購入したのだから、寝る間も惜しんで働いてもらわなくてはローンが支払えなくなる。

百合も自分の部屋があるし、パパの仕事部屋にママの書斎、両親の寝室と客間にサービスルーム、広い居間。五LDKプラスαは少々の頑張りでは維持できないからね。

そう考えている百合は聞き分けがよい子に育った。親の事情はじゅうぶんに知っている。

パジャマ姿の百合はベッドに転がって、ハッピーを相手に考えていた。

人には人のパパとママがいる。

猫には猫のパパとママがいる。

犬には犬、チンパンジーにはチンパンジー、イルカにはイルカ。どんな赤ちゃんにも雌雄の両親がいる。ごくたまに分裂して増えちゃう草履虫のような生き物もいるけれど、基本的には両親がいる。でもその両親はどこから生まれたのだろう。

両親の両親をずっとたどっていくと、日本人も外国人もない。人類のはじまりはたった一人、うん二人。アダムとイブなのだろうか。もっと何億年もさかのぼると、ひとつの細菌のような生物になるのだろうか。

科学では、最初の遺伝子を持った生物は高分子が集まって作られたと言っている。高分子は分子が集まったもの、分子は原子からできている。原子は素粒子からできていると教えている。でも、最初はなんなんだろう。生き物ってどうして生まれてくるのだろう。誰かが生まれさせようと思ったのかしら。それって神様？ そうだとしたって、神様はいつどこから生まれたんだろう。百合は時々そうした不可解な出来事を考える。小学五年生ともなればそれくらい考えられる。大人が考えているほど幼稚ではないんだよ。特に女の子は精神的に成長が早いんだからね。

リラックスして毛繕いしていたハッピーが寝入った。鼻先にそっと触れてみる。かわいているのは熟睡の証拠だ。百合もそろそろ寝ようかしらと照明を消した。ママにはお帰りと言えなかったけれど、もう十一時を過ぎている。夏蒲団一枚かけた百合は、すぐにも軽い寝息を立てはじめた。

寝静まった百合の部屋の前に忍び寄る影があった。その足音がそっと止まった。静かにドアノブが回された。音もなく開けられたドアから百合を見つめるふたつの目。

百合の蒲団の上で寝ていたハッピーが薄目を開けたが、人影を確認してからまたつむった。

——なんだ。おとなしく寝てるじゃないか。義妹の奴、妙な電話してくるから何かあるのかと思ったが心配しすぎだな。

父親は愛情あふれる目で娘を見てからドアを閉めた。どうやら義妹の美帆が虹作にも電話していたようだ。だから心配になった父親が様子を見にきたらしい。

外の風はおさまってきていたが、天候がくずれかかっていた。

空が一瞬明るくなった。鋭い稲光であった。しばらくして遠くに雷鳴が聞こえた。

暗い部屋の中でハッピーの目が開いた。右目がオレンジ、左目がブルーだ。オッドアイとという両目の色が違う猫だ。ごくたまに白猫の中にこうした珍しい猫が生まれる。でも、白猫以外ではほんとうにまれである。もしかしたらハッピーは世界でたった一匹の珍しい猫なのかも知れない。迷い猫だったのは、この目が気味悪がられ捨てられたからなのだろうか。

ハッピーのまん丸く見開かれたブルーの左目は、この部屋にはいないはずの何かを見ていた。部屋の一点を見つめた猫は、シャーッとした威嚇の声をあげた。

「——どうしたの、ハッピー」

寝ぼけ眼で起きあがった百合には何も異常は感じられない。

フツと、淡い光りの筋が見えた。その小さな光りは明滅しながら飛んでいた。

「蛍？ まさか、どうしてこんな部屋の中に」

この蛍に不にハッピーが怒っているのだろうか。いや違う。もっと他の何かだ。ハッピーは蛍のような光点には目もくれずに、バルコニーの方を見ている。何者かがいるかのように。

突然、バルコニーに続くテラス戸が開き、カーテンが揺れた。降り出しはじめた雨が吹き込んだ。

暗い部屋に、眩しすぎる一瞬の稲光が射し込んだ。

ガララララ……雷鳴が轟いた。

百合は反射的に身を縮めた。

何か変だよ。それくらいは百合にも分かった。全身に鳥肌が立っていた。

勇敢な猫は獲物、いや敵に立ち向かうかのように攻撃姿勢をとっていた。頭をさげヒゲを突き出して耳を伏せ、獲物を突き刺す牙を剥き出して、鍵爪を鞘から出しお尻をあげて踏ん張っている。何かいるのかしら、でもここは二九階。泥棒さんが侵入するとも思えない。薄暗くてはよく分からない。百合は、鼠でもいるのかしらと電気を灯そうとした。

その時、ハッピーが飛んだ。いや、見えない何者かに飛びかかったのを空中で、その何かはたき落としたみたいに見えた。

「ハッピー」

身軽な猫は空中で回転して身を立て直して着地をした。

「だれ、誰かいるの？」

百合にも黒い靄のような物が見えた。それに吐きたくなるような匂いが室内に立ち込めた。何かが腐ったような匂いだ。

——ウマレ……タアイィ……ママ・ママッ。

ウマレタイ、生まれたいですって？ 百合には、不気味にうごめくまだらな影、そいつがそん

なことを言ったような気がした。声が聞こえたわけではない。でも、その何かの考えが直接頭の中に流れ込んだみたいだった。

鼠なんかじゃあない。信じられない何かが百合の部屋に侵入したのだ。そいつが好意的な代物ではないことは肌で感じられた。でも、なんだかとてもかわいそうな生き物のようにも感じられた。だけど怖いことには変わらない。

少しその影ははっきりとしてきた。まだらに黒くて軟体生物のように柔らかそうで、卵のような形をしている物体だ。そいつはそこにいるのに向こう側が透けて見えた。

「パ、パパッ。ママーッ。助けて！」

百合は震える声で、それでも力一杯叫んだ。

徹夜で仕事をしていた父親は、百合の絶叫に腰を抜かさばかりに驚いた。転がるように駆け出すとリビングを突っ切って、百合の部屋のドアを蹴破る勢いで飛び込んできた。

「どっ、どうした、百合っ」

父親の乱入にえたいの知れない何かは、自分が入ってきたバルコニーのガラス戸から退散した。

百合はヘナヘナとベッドの横にへたり込んだ。まだ力を入れたまま震えている百合の背後に、父親が片膝をたてて座り、後ろから強く抱きしめた。

「大丈夫だ。もう心配ない」

「パパ、恐かったよ。な、何、なんなのアレは」

「アレって。怖い夢でも見たのかい」

「見てないの、パパは。あいつを」

「あいつって、夢の中に化け物でも出たのかい」

「違う、違う。ほんとに化け物がいたのよ」

「おいおい、じゃあどこから入ってきて、どこに行ったんだい。その変な化け物とやらは、どこに消えたと言うのかね」

百合はバルコニーを指差した。

「バルコニーから入ってきたの。あの開けられたテラス戸から。そこからまた逃げて……あれ——？」

見ると開いているはずのテラス戸が閉まっていた。カーテンも開かれてはいないし、父親が確認すると鍵すらかけられたままだった。いったいどうしたことだろうかと、百合は首をひねるしかなかった。怪物が逃げる時にテラス戸を閉め、ご丁寧に鍵までかけていったとでも言うのだろうか。

「夢だよ。百合」

「夢じゃないよ……そんなのじゃあない」

百合は抗議の意味で何度も首をふった。今のは絶対に夢なんかじゃないんだから。ほんとうにいたんだよ。いくら説明しても父親は何も見えてはいなかった。娘が悪夢にうなされたとしか思わなかった。

危機が去ってアクビをしていたハッピーは、小さな光点を見つけた。

蛍が一匹、静かに部屋の中を飛んでいた。ハッピーはその蛍にじゃれつくが、手をすり抜けるかのようにいっこうにつかまえられない。

その光点が百合と父親の肉体を通り抜けて飛ぶと床の中に吸い込まれるように消えた。まるで実体のない幽霊か、ホログラフィーのようにだ。ハッピーが首をかしげてニャアと鳴いたが、百合と虹作、二人ともその事実にはまったく気が付かなかった。

恐くて自分の部屋で寝てなんかいられないと、百合は父親の仕事部屋にイスわった。父親はパソコンに向かって仕事をしながら娘をなだめようとしたが、いつも聞き分けのよすぎるほどの百合が、いっこうに説得されない。ハッピーを抱きしめて、パパは信じてくれないと思いきりふてくされている。

玄関のドアの開く音がした。ハッピーが百合の手からすり抜け降りて、ドアノブに飛びついて器用にドアを開けた。どうやらいつもの定刻、深夜の〇時過ぎ、母親の帰宅のようだ。

ババが信じないことを、ママが信じるはずがない。パパはこの手の話しに鈍感なだけだけれど、ママはそれ以上、不思議話しが大嫌いなのだ。百合はそのことはじゅうぶん知っているから、その手の話題はママの前では絶対に禁句なのだと心得ている。これが美帆叔母様だったら話を聞いてくれるし、分かってくれるのにと少し不満でもあった。

どうしよう。ママはこんな時間まで娘が起きていると雷を落とす。さっきの部屋で一人寝るのは恐いけれどママの雷も恐い。迷いながら、とにかくトイレに起きたふりでもしようかと父親の仕事部屋を後にした。リビングで百合は、タオルを手にしていた母親の美貴と顔をあわせた。美貴の肩や足下は少し濡れていた。雨が強かったようだ。

「お帰りなさいママ」

「あら、まだ起きていたの」

「う、うん。オトイレ」

「そう。百合、何か変わりはないか？」

「ううん、別に」

「なら、いいけれど」

母親の美貴は少々疲れたといった顔で帰宅したのだが、珍しく娘に優しい声をかけた。夕方の妹からの電話が少しは気になっていたからだ。

百合は今のママなら不思議話しも聞いてもらえそうな気がしたが、いつものママを思うとそのことに対しては口をつぐんだ。それにやっぱり少しお酒くさい。仕事での接待らしいのだけれど、百合はお酒のおいしさは好きではない。もっともお酒好きな子供なんて、まずいないのだろうけれど。

「ママ、食事まだなんですよ。レンジで温めようか」

「いいわよ、それくらい自分でするわ」

美貴はお酒が残っているのか、少しふらつきながら、百合の用意しておいた夕食を冷蔵庫から取り出して電子レンジに入れた。百合は知っていた。いつもママは二口、三口食べただけでトイレに流してしまう。娘に食べ残しを気づかれないようにしているつもりなのだろうが、百合は何

か悲しいというかせつない気分になる。

おやすみを言って百合は、ハッピーを両手で抱っこして自分の部屋に戻った。

やはり寝付けない。

百合は顔を伏せ気味に勉強机に座った。手持ちぶたさで、パパにおねだりしてもらったシャープペンシルをクルクルと指先で回した。もういいや、朝まで起きていようかと思った百合は、あれっと、机の上にある携帯電話に目がいった。携帯電話にメールの着信があることに気が付いた。

叔母さんは

いつもいつでも百合の味方

何か恐い目に遭わなかった？

いつでも、真夜中でもいいから

悩み事や相談したいことがあったら

電話やメールをしてね

美帆

「叔母様からだ」

着信時間は三〇分ほど前だった。どうしようかと迷った。深夜にヒソヒソ話しをしていたら、ママに叱られるのは目に見えている。でも美帆叔母さんと話しがしたい。メールでは物足りない。声が聞きたい。

叔母の美帆は母親と一卵性の双子だから声もそっくりなのだけれど、その話し方はまるで違う。母親は早口だしトゲトゲしているけれど、叔母さんはゆっくりと話すし優しいトーンだ。その声を聞いているだけで百合はいつも心が暖かくなる。

百合は迷ったあげくバルコニーに出た。えたいの知れない怪物が入ってきたバルコニーだから、恐かったけれどピツタリとテラス戸を閉めれば、他の部屋に声は聞こえないはずだ。

「——もしもし、叔母様。百合です」

「百合ちゃん。電話がある頃かなと思っていたわ」

「私、わたし……」

百合は美帆叔母さんの声を聞いたら、急に安心したのか泣き声になっていた。声ももつれて何を言っているのか分からなくなった。百合の心にもう何があっても大丈夫なのだと、安心感が満たされていく。叔母さんがママだったらどんなにいいだろう。百合は自分の母親が嫌いなわけではないが、母親の妹である美帆に対して憧れに近い感情を持っていた。

「やっぱり恐い目に遭っていたのね。いいわよ。無理に話さなくても。いいこと、うなずくだけでいいから私の話しを聞いて」

「——う、うん」

百合はバルコニーの手摺りに寄りかかった。手摺りは雨に濡れていたが、すでに雨はあがっていたし強い風も吹いてはいなくなっていた。空には煌々と満月が輝き、星々が見えていた。風が

暗雲を吹き払ったのか、都会の住宅地には珍しく銀河の流れ、天の川がはっきりと見えていた。

「私も子供の頃、そう百合くらいの歳ね。おそらく百合の見た物と同じ類の生き物を見たことがあるの」

「え、ほんと。叔母様もなの」

百合には意外な言葉だった。美帆叔母さんもこんな怖い目に遭っていたのだとは。しかも自分と同じくらいの歳の時に。

「そう。百合も狙われるかもと思ってはいた。確証があったわけではないから、まだ黙っていたけれど。話していなくてごめんなさいね。でも恐がりすぎないでね。恐がったりするとあいつらはいい気になるの。恐がらなければ、何もできない。だって体がないんですもの。でも、幽霊ではないわ」

「じゃあなんなの、アレは」

「私も確かなことは分からないわ。いったいどこから来たのかも分からない。どこか別の世界の生き物としか考えられない。いえ、まだ生き物とすら言えないのかも」

「そ、それじゃあ、やっぱり幽霊——？」

「いえ、霊ではないのよ。ちょっと百合にはむづかしいかも知れないけれど、霊は霊体という体をちゃんと持っているものなのよ。叔母さん少しばかり靈感があるから、霊と話すこともたまにはあると前に話したわね」

「う、うん。聞いているよ」

美帆叔母さんは靈感がある。だから占いが職業になった。占いと言うと語弊があるのかも知れない。叔母独特の理論があるらしい。百合は叔母がどんな靈感があるのかは、はっきりとは聞いてはいない。霊能力にも天国に通じる良き物と、地獄に通じる悪しき物がある。叔母の霊能力は少なくとも、人を恐がらせる類の物ではないようだ。

「霊にはほんの数グラムだけれど、ちゃんと重さがあるものなのよ。でもあいつらはそれすらまったく無い。ただ思いだけの存在。純粹にというか、まったく心だけの存在なのよ。それもまだ自分がなんだか分からない赤ん坊みたいな。それも虐めっ子みたいにどこか屈折している心」

「あいつ変な匂いがしたわ。卵の腐ったような吐きたくなるようなとても嫌な匂いが」

「そう。やはり匂いも感じたの。私の時と同じね。でもそれは本物の匂いではないわ。幻臭なのよ」

「幻臭ってなあに」

「幻の匂いよ、実際にはない匂い。幻覚と同じ類のもの。相手の心の匂いを感じているの。いわば一種のテレパシーみたいなものよ。それは五感、つまりね見ること、聞くこと、嗅ぐこと、味が分かること、触れられると分かる体全体の肌感覚、そうしたすべての感覚に起こりうる。でも普通の人はその物は感じないもの。その現場にパパやママがいたとしても、多分何も見なかっただろうし、聞くこともなかった。もちろん匂いを感じることもないはずよ」

「あの怪物、パパやママには見えないの。じゃあ、いくら説明したって」

「理解はしてくれそうにはないわ。そうした期待はしない方がいい」

「叔母様には見えるのでしょ」

「さあ、分からない。子供の時には確かに見えただけ。でも、今は見えるかどうかははっきりとしない。あれ以来見てはいないの」

そんな、みんなにはあいつが見えない。感じない、透明人間みたいな怪物なのだ。百合はまた鳥肌がざわざわと立ってくるのを感じた。あいつを見ることのできるのは、私とハッピーだけなのだ。とんでもない物に見込まれたものだ。逃げ出したい気分だ。でも叔母のおかげでそれがなんなのか、少しは分かったような気がした。

叔母はいつになく、厳しい口調になっていた。

「これだけは確か。あいつらは聞き分けのない年下の子供だと思って、もしまた現れてもそう考えて接しなさい」

「またって、やっぱり来るのあの怪物——」

「おそらくね。でも無視してもいいわ。それもひとつの方法。恐がりもせず相手にもしない。何があっても、ずっと我慢。無視し続けていけばいなくなるしね。くれぐれもパニックになって恐がらないで」

「で、できるのかなあ。私に」

不安げに言った百合に叔母は励ますように、さとすように、力強く言った。勇気がわいてくる魔法の言葉のようであった。

「大丈夫よ。百合ちゃんならね。百合ちゃん、私の小さい頃に似ているわ。私にできたことが百合にできないとは思えない。大丈夫、百合なら絶対にだいじょうぶ！」

「うん——」

「よし、それでこそ百合だぞ」

美帆叔母さんの澄んだ声が、暖かさとなって百合の心に染みいった。心は言葉となってそのイントネーションとともに、込めた想いが相手に伝わる。心と反対の言葉を言おうと、またたとえ言葉が分からなかったとしても、その込められた想いは感じるものだ。その想いを伝えられ、感じられる相手を相性がいいと言う。美帆叔母さんと姪の百合は一卵性親子のように相性がよかった。

百合は叔母といっしょならば、何が起こったとしても乗り越えられないものはないと思えた。

コツンと、百合の頭に何かあたった。少しビクツとしたが、叔母と話して心が落ち着いていたので悲鳴をあげずにすんだ。見ると、ノートを破って作った紙飛行機であった。それはたまに下の階から飛んでくる見慣れた紙飛行機だった。でもこんな時間に飛んで来たのははじめてだ。

「こらっ、何くっちゃべってんだよ。夜中に泣いたり叫んだりうるさい奴だな」

「翔二」

「おめー、雷でも恐かったンか。意気地なし」

「そ、そんなのじゃあないよ」

百合は叔母に礼を言って携帯電話の通話を終えた。

紙飛行機を飛ばして来たのは、下の階に住む同級生、幼なじみで兄妹のようにしている馬場翔二であった。ちょうど百合の下の部屋が翔二の部屋になっている。数ヶ月だけ翔二の方が早く生

まれているので、兄貴風を吹かしている。翔二はいつものようにバルコニーから半身を乗り出している。けっこう危ない姿勢だ。何しろ、百合の階は二九階、翔二の階は二八階、高さが一二〇メートル以上はある。もし落ちたら潰れたトマトになってしまう高さだ。

「おい、非常用の梯子を使うから、ハッチ開けろよ」

マンションのそれぞれのバルコニーに、下の階に通じるハッチがある。ふだんはもちろん閉めているが、翔二は時々それを伝って百合の部屋に遊びに来たりしている。

「な、何よ。こんな時間に」

そうよ。こんな時間に女の子の部屋に来るなんて何考えているの。それに私パジャマ姿なんだし、もう。

百合は翔二を見ていつもの百合に戻っていた。声をかけてくれた翔二の存在が嬉しくなった。そうだ。下の部屋には翔二がいたのだ。ありがとう、翔二。でも、百合はそうした言葉は口にはしない。

翔二はつっけんどんに言った。

「こら、開けないならバルコニーからよじ登って行くぞ」

「馬鹿、危ないからやめなよ。もう遅いから明日学いつものエレベーターホールで」

「遅い時間にわめいてたのは誰なんだってばよ」

「うるさいなあ」

「バーカ」

と、翔二は軽口をたたいた。百合も少しバルコニーから乗り出した姿勢で言った。

「おやすみ翔二」

「ああ、寝ろねろ」

百合がピツタリ締め切ってた戸を開けようとする、バルコニーに出られなかったハッピーが、ガラスに爪を立てて怨めしそうにかいていた。部屋のドアノブは前足で器用に開ける猫だ。バルコニーに通じるテラス戸も、少しの隙間があれば前足を入れて開けてしまうのだが、閉じきってしまえば器用な猫でも開けられなかった。

優鬼の森の封印石 第1章 何かが生まれようとしている

<http://p.booklog.jp/book/73932>

著者：こころ 耕筈 彩虹房

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/saikoubou0/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73932>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73932>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ

